

新修 芦屋市史 資料篇

総 説

芦屋市の位置と環境 芦屋市は旧摂津国の西辺部に所在した菟原郡の故地である。現在の位置は阪神地域の中央よりやや西寄りの地域で、北半部は六甲山地に属し、南半部は大阪湾に臨む風光明眉な住宅都市である。市域は東西約二キロメートル、南北約七・五キロメートルの短冊形を呈し、面積一六・〇七平方キロメートルをはかり、東は西宮市・西は神戸市に接している。地質学の成果からみた芦屋市の歴史は、約三億年前の古生代の後半に陸地として出現し、中世代に花崗岩が当市域の地下一帯に進入し、やがて内部の花崗岩が地表に露出する時期をむかえ、新世代鮮新世の終り頃に芦屋市域から大阪湾にかけての地域は沈降して古大阪湖をつくり、まもなく瀬戸内海の一部となつたらしい。洪積世の

中ごろになつて六甲山地が形成され、山麓部も海底の地層が陸化してやがて台地となつた。この時期は世界的にも氷河時代で、海面が低下して日本の地域も大陸と地続きとなり、大陸から旧象たちが渡来することになった。沖積世のはじめ、気候の温暖化とともに大阪湾の海面は現在よりも約五メートル高く、海岸線はほぼ阪神電鉄付近であつたと推定され、その後わずかな海退があつて現在の海岸低地が誕生したと考えられている。検出されている遺物には、芦有道路工事で発見されたナウマン象の化石、朝日ヶ丘地区で発掘された旧石器などがあり、洪積世の時期に人類や旧象の存在した可能性が立証されている。動植物や魚貝類化石の発見も多い。

考古上の成果

旧石器文化と縄文文化については、戦前から朝日ヶ丘地区を中心に市内の北半部において石器を主とした遺物の検出があり、戦後も周辺の新成工事に関連して発掘調査や分布調査がなされて、市域内最古の居住民の具体的な生活器具が発見されている。旧石器文化の遺物は朝日ヶ丘遺跡から検出されたナイフ形石器・ポイント・石核・スクレイパーなどを代表とする。敲打器文化に属するものはないが、次の刃器文化・尖頭器文化・細石器文化に属する遺物が確認されている。

縄文文化の遺物は朝日ヶ丘遺跡出土の多量の縄文土器と石器を代表とするが、岩園町地域では石器が単独に採取されている。石器には石ヒ・石斧・砥石・投弾・石鏃があるが、石鏃が最も多い。石質はサヌカイトが主であるがチャート・黒曜石のものもある。土器は多量の爪形文のほか刺突文・条痕文・磨消縄文などがみられるが瀬戸内地域の影響が強く、羽島下層Ⅱ式・Ⅲ式のもの为主で縄文前期初頭のものばかりである。前期後半の大歳山

式土器は検出されていない。また、中期・後期・晩期の遺物も出土例はない。

数千年の空白期間において、弥生文化の中期になって市域内に農耕民の遺物・遺構をみる事ができる。弥生文化の遺物は中期から終末期まで発見されているので芦屋地域の開発はこの時期からと考えてよい。当市の弥生文化の特色は会下山・城山を代表とする山頂式高地性遺跡の所在することである。六甲山系の南面する地域には弥生中期以降高地性集落址が発見されているが、会下山遺跡は全遺構の発掘調査が完了した標式的遺跡として注目されている。

標高一九九・二二メートルの最高所には露天の祭祀場(S)があり、その直下に祭壇的設備をもった祭祀施設(Q)がある。これら祭祀場の下方に、径一メートルの大きな首長住居(F)があり、この住居址だけが炬をもっている。首長住居の外側に柵址(P)があり、その下方に円形五本柱の竪穴式住居址(C)やソトクド址・物置址(D)が並ぶ。東西尾根上には一般集落(X)(N)(J)やソトクド址(N)(U)、泉址

(I)、廃棄場址(O)、倉庫址(J)などがあり、集落の外縁部に壺棺を包蔵した土塚墓(J)(M)が遺存していた。

なぜ狭い山頂尾根部に集落を営んだのか、祭祀と関係があるのか、避災的集落なのか、山の民の集落なのか、軍事的緊張の産物なのか、海上監視の必要から設けられたものなのか、単なる見張り所なのか、山から山への連絡施設なのかなど高地性集落出現の理由と時期・機能・終焉の理由を考慮に入れた考察が必要である。

会下山遺跡出土の土器は第Ⅲ・第Ⅳ・第Ⅴ様式の土器であり集落が継続的に存在していたことが解明されている。鉄斧をはじめ豊富な鉄器、漢式三翼鏃や銅鏃、磨製石鏃や片刃石斧・投弾・石鏃などの石器、コバルト色のガラス小玉など遺物にも注目すべきものがある。石包丁がみられないことも特色であろう。

この時期に当市域及び周辺地域で発見される青銅器に銅鐸・銅剣・銅戈などがある。とくに銅鐸は大阪湾沿岸に顕著な発見例がある。最古の形式は発見されず、古の(古)が伊丹市中村で、古の(新)が豊中市岡町・宝塚市中山・芦

屋市楠町・神戸市森・同桜ヶ丘で発見され、中の(古)は神戸市桜ヶ丘、中の(中)は神戸市桜ヶ丘・同生駒・同渦ヶ森で、中の(新)は西宮市津門で検出され、新の(古)が川西市満願寺、新の(中)が箕面市如意谷、新の(新)が川西市栄根から出土している。出土地だけに注目すると武庫川以西の弥生中期以降の小遺跡が粗に点在する地域に密度が高く、武庫川以東の弥生前期以来の全国的に著名な大集落遺跡が密集する地域に粗な状況であり、銅鐸の分布と遺跡の関係は必ずしも一致しない。おそらく淀川・猪名川流域文化圏から拡散された結果によるものであろう。

当市の楠町堂の上出土鐸は宝永三年に発見されたものである。銅鐸が埋納されたまま再び使用されることがなかったことは、弥生文化終末期に銅鐸を宝器とする社会体制・宗教体制・政治体制の変化が生じたことを推測させる。銅鐸と高地性遺跡の関係にも注目すべきである。

当市域には大規模な前方後円墳は遺存しない。古墳時代には統一王朝との係りあいを含めて強大な豪族の居住地ではなかった。前期古墳が親王塚近辺に存在したこと

は確実で、陳孝然作竟・三角縁神獸鏡・内行花文鏡などの出土品が保存されている。陳孝然作竟(四神二獸博山炉鏡)は舶載品、波文帯三神二獸博山炉鏡は広島県掛迫古墳・奈良県佐味田貝吹古墳・岐阜県円満寺山古墳出土鏡と同范である。後期古墳は八十塚古墳群を代表とする。山麓線の群集墳と各支群の關係が、研究課題となつてゐる。とくに八十塚古墳群出土の陶棺、三条・城山古墳群出土の竈形土器、朝日ヶ丘古墳群出土の純金製垂飾付耳飾など地域的特色を示す注目すべき遺物もある。

歴史時代の史料と遺跡 芦屋市域には菟原郡条里が遺存していたことは確かであるが、度々の山津波や近代以降の開発でその遺構は残されていない。

『行基年譜』の天平二年(七三〇)には「菟原郡に船息院・同尼院」を建立した記事があり、また『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』には天平十九年(七四七)に「撰津国菟原郡参拾壹町陸段式百捌拾捌歩」という寺田の記録がある。さらに太田亮によると「撰津国菟原郡葦屋郷に葦

屋蔵が設置され、倉司として葦屋君、倉部には葦屋倉人・葦屋漢人があつた」とされている。船息院・同尼院・法隆寺寺田・葦屋蔵いづれもその故地は不明である。

『正倉院文書』の天平神護元年(七六五)に「從八位上勳七等葦屋倉人嶋麻呂」の名があり、『続日本紀』の神護景雲三年(七六九)にも「撰津国菟原郡人正八位下倉人水守等十八人に大和連の姓を賜う」記事がある。『新撰姓氏録』のなかにも「葦屋藏人・葦屋漢人・葦屋村主」などの名があり、渡来系氏族の後裔とされている。『日本靈異記』のなかにも「葦屋君氏」の名がみられる。古代の当市域の有力者を推定する手掛りにはなろう。

西山町からは葦屋庵寺址が発見されている。明確な遺構はないが、礎石・遺瓦などの遺物からは奈良時代前期以来近世初頭に至るまでの寺院址であつたことが知られる。周辺の奈良時代寺院址は豊中市新免庵寺、伊丹市伊丹庵寺、尼崎市猪名寺庵寺・同若王寺庵寺などである。伊丹庵寺と猪名寺庵寺が発掘調査によつて遺構が明らかにされている。葦屋庵寺は三度の発掘調査によつて遺構は

掘伴されていることが明らかとなつた。遺瓦と土器類が白鳳期以来近世まで継続的に採取されているため、この集積が近辺の歴史時代遺物の標式として重要性をもつ。

『延喜式』には「撰津国 草野・須磨各十三疋、葦屋十二疋」とあり、葦屋が馬十二疋を常置していたことが分る。ただしその故地は不明である。船息院・同尼院、葦屋蔵、葦屋駅からは西国への水陸交通上の要衝であつたことを推測させる。葦屋庵寺址の位置と無關係ではなさそうである。船戸の所在説もある。

西国への往來の貴類に因んだ文字遺跡の伝承ものこされ、王朝貴族の古歌にも風光明眉を市域の地形と風土が詠まれている。中央政界からはうとんぜられたといわれる阿保親王墓も市内翠ヶ丘町にあり、その子在原業平の伝承も伝えられている。打出観音堂に安置されている木造十一面観音立像は業平にまつわる伝承をもつ藤原彫刻である。

(1) 行基年譜には異論もあるが、天平二年には菟原郡で船

息院・同尼院、西成郡で善源院・同尼院、嶋下郡では高瀬橋院・同尼院を起工している。「船息院・尼院已上二院同国菟原郡宇治郷」とあり、宇治郷の場所は不明である。西接する八郡には宇治郷の名がみられる。

(2) 天平十九年二月十一日の記事で法隆寺はこの年までに近江・河内・播磨と撰津国菟原郡で水田三九六町三段余を所有していた。同記事に「撰津国菟原郡宇治一郷」とあり、宇治郷が不明である。

(3) 『日本上代における社会組織の研究』一〇四二頁・昭和四年十月十五日・磯部甲陽堂

(4) 大日本古文书五卷一五二八、「検仲麻呂田村家物使請経文」天平神護元年五月九日

(5) 続日本紀・神護景雲三年六月癸卯条

(6) 群書類従卷四四八

(7) 新訂増補 国史大系 第二十六卷 延喜式卷第二十八兵部準人、延長五年(九二七)撰、「諸国駅伝馬」の項

中世の動き 地理的立地条件のゆえに芦屋市域は、平安時代の末期以来激動の政治情勢にしばしば捲込まれることになる。

当市域には鎌倉時代の中頃に葦屋庄が存在し、葦屋姓

を名乗る一族が大名主として勢力を振っていたらしい。元寇の際して異国調伏の祈禱をした西大寺の僧叡尊(興正)は、弘安八年(一二八五)に葦屋氏宅に宿泊し、住民に菩薩戒を授けていた。この頃には全国的に社会秩序に抗する風潮があらわれ、摂津国にもその例は多く、東大寺・興福寺の管下である兵庫関の騒擾事件には打出を本貫とする後藤らいわゆる悪党三名が参加している。

南北朝時代になると当市域も戦乱の巷となり、元弘三年閏二月(三三三)には鎌倉幕府の六波羅勢と播磨の赤松円心(則村)との合戦、延元元年二月(三三六)の足利尊氏勢と楠木正成らの打出・西宮浜の合戦、観応二年二月(三五一)の足利尊氏と直義の打出浜合戦などが有名である。

室町幕府治下においても一時的な不安定期があったものの、將軍と守護大名の対立抗争、世情不安からくる下剋上の風潮、郷惣村形成の風潮は度を増してくる。このような社会情勢を反映して、従来から当地域に設置されていた諸荘園、長講堂領葦屋荘・大光明寺領葦屋荘・北野

社領葦屋荘・神祇伯家領葦屋荘などが多くは不知行の相を呈し、在地の土豪・国侍・被官などの進出がいちじるしくなる。

応仁の乱に端を発した管領細川氏の内紛はいわゆる足輕大名河原林正頼(瓦林政頼)らの奔走によってかえって激化し、葦屋の鷹尾城、西宮の越水城の動きが当地方をしきりと刺激し、中央の権門たちの関心をひきつけた。

戦国末期に三好長慶の勢力は五畿内を制したが、天文二十四年(一五五五)の頃、葦屋庄持山東西十八町をめぐって、東の西宮社家郷、西の本庄と葦屋庄民との間に起った山論は長期にわたった。葦屋庄民が挙げて三好長慶の居城芥川へ逃散したとも伝えられ、永禄三年(一五六〇)冬に長慶の家臣松永久秀の斡旋により、五年のち帰村するという歴史的な大事件も経験している。

また、遺存数は多くないが、中世の金石文・石造美術品も市内から発見されている。

第一篇 考古篇